

文部科学大臣賞

「一本の糸が切れないように」

東御市立北御牧中学校 1年

青木 緋音

私は、小学二年から、兄二人と発展途上国へ絵本を贈る活動に、毎年参加してきました。しかし、兄達と違い、まだ幼かった私は、平和で恵まれた日本の中で、世界の現実を実感できず、成長と共に、本当に役に立っているのかという苦しさが生まれていました。

昨年、私は、小学生の自分にも、もっと何かできることはないかと考えました。それにはまず、世界の現状を知らなくてはならないと考え、東京へ行った機会に、市ヶ谷の JICA 地球ひろばに出かけました。そして、企画展だった『衣』を通じてみる世界に衝撃を受けました。世界各地の民族衣装と同時に、私達が今、身に付けている服が、過酷な児童労働によって作られていることを知ったからです。日本で安く大量に消費される服のために、自分と同年代の子供達が、学校にも行けず強制労働させられ、しかも、大量生産のために使われる農薬で病気に苦しんでいる事実を知って、自分が恥ずかしくなりました。いつも兄二人のお下がりばかり着せられていた私は東京で、女の子らしい洋服を見て帰りたいたいと思っていたからです。豊かな暮らしの陰で苦しむ人がいることに思い及ばなかった自分が、本当に人として情けなく、恥ずかしく、綿花の畑に埋もれて働く少女の写真の前で立ち尽くしてしまいました。私達が、当たり前と思っている便利さや安さを求める生活の陰で起こっている事実を、しっかりと見極める目を持たなくてはならなかったのです。私達の衣食住に関わるすべてが、どこからどのように来るのか、そのことすら意識できていなかった自分を思い知り、もっと世界に目を向けなければと思いました。もちろん、展示は写真や人形でした。しかし、何かを学びたいと考え、自分の足で出かけたからこそ、家や学校で見る本や写真では感じられないものを得られたのかもしれない。自分から行動し、見えない世界を知ろうとする意識を持たなくてはならないと痛感しました。クリスマスの店頭に並んだ綿の枝を見て、彼女達を思い出し綿を育ててみようと思いました。少しでも自分の体を通して、同じ体験をし、苦勞を知りたかったからです。今年も途上国に絵本を送りました。国は違いますが、今年は送った先に彼女たちのように学校に行けずにいる子供達の姿が見えたように感じました。私達一人一人が、暮らしの中に、疑問や関心を持ち、自分の生活を見直すことで世界を変えることができるのです。今は、兄のお下がりの継ぎ当てのある運動着が誇らしいです。

私は将来、貧困や紛争で犠牲になる子供達の手で働きたいと考えています。中学生になり、庭に綿の種を蒔きました。秋には綿花が開きます。そこからは、たった一本の糸し

か取れないかもしれません。しかしそれは、自分の暮らしの陰にある、世界中の人達と私を結ぶ糸です。小さな種から生まれる一本の糸が切れないように、その糸で彼女達のような子供達と世界の未来を紡いでいきたいです。